

ラフに考える多文化共生

いったいなぜ、私たちはこの社会のこと、世界で起きている戦争のことを考えなければいけないとされるのでしょうか？そんなことには目を向けず「目の前の自分の人生」に向き合うことだけではダメなのでしょうか？

こういった問いにうまく答えることは難しいと思います。なぜなら人それぞれに正しさというものがあり、その正しさの方向が違ってしまふことは当たり前でよくあることだからです。大人ならば尚更、この難しさを知っていると思います。でもだからこそ、この問いは繰り返し問はねばならないと思うのです。それは人間ひとりひとりの「目の前の自分の人生」を歩むその生活の場はまさに、誰もがこの世界と地続きであるからです。

目の前の自分の人生と向き合うことと、社会や世界のことを考えること、このことは思考を持った人間ならば本来両立して考えることができるのではないのでしょうか。これはわがままな問いになってしまうのか。私たち人間は対立するのではなく、その違いを理解した上でできるだけそのまま、さまざまお互いの違いを話し続けなければならないと思うのです。違いを押し付け決別するためではなく、共生していくために。そしてこうした話題はオープンな場でどんどんラフに議論されていいものだと思っています。このような議論は決して人々に亀裂を生むものではなく、さまざまな意見の違いを持ったもの同士がともに暮らしていることを実感するために大切なものなのだからです。多文化共生とは、大きな枠組みでとらえると他国の文化との違いの問題のように思われがちですが、人間一人ひとりの「文化」との共生ではないのでしょうか。この問題は、外国籍の人に対してのみではなく、女性差別やLGBTQの問題と大きく絡んでいきます。目に見えないジャンル分けで人間を区別するのではなく一人として同じ人間はいないということを実感し、受け入れ、対話を続ける。この姿勢を育む教育がなされることはもちろん望みますが、子どもの教育の場は学校だけではないのです。私たち大人が生活の場においてこの姿勢を保つことができるようになり、その空気が広まっていけば、いずれ誰もが当たり前にか他者と共生していける社会になっていくことができるのではないかと考えています。

多文化共生を実現するためには、まず個々人が日常生活で他者を理解し受け入れる姿勢を持つことが重要なのではないのでしょうか。そしてそのために必要な「考える力」をこれから子どもたちに育むこと、大人たちが思い出していくこと、これらを目標とし個々人のアクションを考えるきっかけとしたい。

「思考すること」を他者に委ねる社会

多くの現代人は日々の暮らしに疲れ果て、そんな中でSNSは気軽に楽しむことができるコンテンツとなっています。しかし、それはあまりにも気軽に、『SNS断ち』という言葉がうまれるほど多くの世代に深く浸透しています。スマートフォンでスクロールするだけで、情報が一気に流れ込んでくる。その情報はAIによって個人のデータに合わせてチョイスされており、知らず知らずのうちに偏った情報が舞い込んできては直接その人に影響を与えています。単純に多くの情報と、気になる情報を気軽に手に入れた時の満足感、小さな画面からもたらされるこれらの全

ては、時間のない現代人と相性がよく、最も簡単に支配します。支配というと聞こえが悪いようですが『SNS断ち』しなければならぬほど特に意味もなく夢中になってしまうのですから、これはまさしく支配の一つでしょう。

危惧しなければならないのは、こうした情報を集めて眺めていることは、思考する作業とは全く異なるということです。時間を溶かすと形容されますが、溶けてなくなってしまう感覚があるように、仕入れたはずの多くの情報はその人の中に残らず、ほとんどが消え去ってしまうという実感があるからでしょう。SNSは使い方次第では有意義なツールにもなり得ますが、問題はそういった危険性に気が付いていないまま（または気が付いていても自らの意思では容易に止められないまま）使用してしまうことにあります。

さらに、SNSツールにはお金を出せば広告や関連情報を減らすことができるものがありますが、ほとんどの人がお金を払おうとはしません。そして、その資源を払うことができない人（無駄だと思っていてしない人）には次から次へとさまざまな情報が流れ込んでくるようになってきました。特に深く考えずに流れてきた情報に気になるものがあつた時に、それが偏った意見であつた場合、まさにここに危険性があるのです。

たとえば、日本政府に対して外国人向け政策ばかりを進めると思っていることに対する怒りを持った人のポストが目に入り、「なんとなく」それもあるかもなと感じていいねボタンを押してしまう。するとそこから関連ポストが次々に舞い込んでくるようになります。そうして「たくさん」の意見を見ているうちに、自らが「日本政府に対して考えた」と錯覚してしまうのです。恐ろしいのはその中に、政府に対してではなく、日本に暮らす外国人に対する批判も真つ当だと主張する意見も含まれていることです。外国人雇用が増え、身近に暮らす外国人が増えていますが、彼らの中には地域の決められたマナーを守れないという問題がみられることがあります。こうした文化の違いがあるために生じてしまうすれ違い問題は多々あります。しかし、すべての外国人がそうであると決めつけることが間違っていることは、関わりを持ったことのある人なら当然と感じるでしょう。ですが関わりのない人たちににとっては、嫌悪感が生まれてしまうのみです。この問題の解決には双方に共生の努力がないと成り立ちませんが、日本のマナー問題とは特に相性が悪いです。そして相手のバックグラウンドなど知らないままに、自らが関わる機会がないままにこうした批判のマイナスの面ばかり見てしまうと、その人の世界には「外国人批判」がまさに正当性を帯びてしまうのです。

人を見ないで人種で差別することの危険性がなにをもたらしたのか、このことはすでに歴史が証明していますが、その恐ろしさも忘れられてしまっているのでしょうか。

「歴史」を無視することを「自由」と捉える人々

歴史研究者である小野寺拓也と田野大輔が共同執筆した『検証

ナチスは「良いこと」もしたのか』の中で事実から意見への飛躍の危険性について述べています。歴史的事実は〈事実〉〈解釈〉〈意見〉の三層に分けて検討することができ、この〈解釈〉の中には当時の人たちの暮らしや、さまざまな事実性（当時の人たちが実際にどう思っていたか）を含んでいます。それらを飛び越して、当時の事実を

今自分がどう思うかということで語られてしまうことがあるのです。この本では、その結果「ナチスは良いことでした」という意見を持つ人が生まれてしまうということが語られています。

「目的や文脈などはどうでもいい、良いものはいいものだ」と感じる人も、ひょっとしたらいるかもしれない。確かに三つ目の層である〈意見〉は最終的には個人的なものであるから、そのような考え自体を持つことは止めることはできない。ただしそこでぜひとも知っておいてもらいたいの、ドイツ語の「Tunnelblick」という言葉である。そのまま日本語に訳すと、「トンネル視線」とでもなるだろうか。自分にとって都合のいいところだけを照らし出し、それ以外が見えなくなっている状態を指す。

〈事実〉のレベルから〈意見〉の層へと飛躍してしまうと、「全体像」や文脈が見えないまま、個別の事象について誤った判断を下す結果となることが多いのである。（『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか』小野寺拓也 田野大輔）

さまざまな〈意見〉が溢れかえる現代では、こうした〈意見〉はSNSに数多く散らばっています。これらの意見は確かに〈解釈〉をした上で発言している人ももちろんいるでしょうが、それを受け取る側にその〈解釈〉は見ることはできませんし、それはあくまでもその人のものであって、「わたし」が解釈した結果なのではないのです。こうして解釈が抜けたまま、過激な意見がまるで正当性を帯びているかのように、自分で考えることもなく正しいのだと錯覚してしまうのです。

第二次世界大戦の後には、ナチスドイツによるユダヤ人迫害や核兵器使用による被害がいかにひどいものだったかその後しばらく人々は痛いほど痛感したでしょう。おかげで今日の私たちは、さまざまな方法で当時を知ることができます。そこには語るに苦しい現実を語り継いでまで、後世に同じ思いをさせない為に尽力する人々がいたからです。しかし現在多くの人が、歴史から学ぶことを遠ざけています。思考することを他者に委ねて、さらには「近づく必要がない」「あえて近づかない」と考えている人たちもいます。

こういった人たちは、「近づかない」の背後に、自己との対話の欠如や資本主義社会の影響があることに目を背けています。さらにこうした「考えない」姿勢は、その選択をも「自由」と勘違いしてしまうことの恐ろしさを孕んでいます。

自由とは何か考えた時に、このように「考えないこと」や「社会から目をそらすこと」をも自由と考えてしまう人がいるのは、こうした影響にのまれてしまっていることにすら気が付いていないからでしょう。これはその人自身の問題だけではなく、社会がそのような仕組みになってしまっていることに原因があると考えられます。

このような社会の仕組みに対してできる抵抗、それこそが本来の『自由』なのです。その自由は人間一人一人に与えられて然るべきです。そこには人種や性別の壁などないはずなのです。そして、その自由を守るためにも私たちは歴史から学び続け、それぞれが思考し続ける必要があります。

このグローバル教育フォーラムは、ひとりの「市民」としての意思表示の場としてあります。

私たち一人ひとりの人間のかげがえのなさを、私たち自身で守るためにこの場を借りて些細ながらも私の意思表示

の機会をもたせていただいたことに感謝いたします。

すでに社会全体は、たった一人の力ではどうにも変化しないところまで来てしまっています。大きな強い声ばかりがフォーカスされて、「努力」が個人の能力の賜物だと信じるが故に「環境のせいにするのは努力が足りないからだ」としてしまう、社会的弱者と言われる人たちに対しての分断が始まっています。私たち人間は、生まれる環境は選ぶことができません。類稀なる努力をした者たちへの賞賛は当然ですが、個人の力ではどうにもできないことがそこには潜んでいることに見て見ぬ振りをするのは、巡り巡ってわたしたち自身を苦しめる事になるのではないのでしょうか。考えを止めてしまうこと、それが一番恐ろしい事です。

周りが考えていないから考えない。「一人で考えていても世の中は変わらないから、今日の前の自分のことだけ考えよう」そう大多数に思わせることによって得をする人たちがいること。自分の幸せだけを追い求める人が増えれば増えるほど、自由だと思っている人が増えれば増えるほど、共同体は崩壊していき、そうして後の社会は崩壊していく。

もちろん渦中にいて、この後の世界など気が付かないまま幸せに死んでいった人たちは沢山いて、その人たちは確かに幸せだったに違いない。それに、先の未来の話など、知った事ではないのかもしれませんが。

しかし、今まさに人間に対する虐殺が行われていて、それに反対するために声を上げない理由は何なのでしょう。自分の人生を生きるとは、自分以外の存在を無視しながら進めることなのでしょう。

それができる人はやればよいと言うだけの話でその通りで、結局戦争は終わらないからやらせておけばいい。しかしそれはここでは戦争は起こらないからという安心感からくるのではないのでしょうか。ナチスドイツの支配はいつの間にか市民の生活に浸透していきました。

「郷に入っては郷に従え」

この言葉は、決して抑圧の言葉ではないはずです。その地の、自分とは異なる多様もつ世界へ足を踏み入れるために必要な合言葉ではないのでしょうか。

答えが出ないような問題に対して「考え続けること」誰かの意見に賛成・反対、以上。ではなくて、あなた自身が自分の言葉でどう考えているかを教えてほしいと思います。でもそれは、日常の中に溶け込んでいくもので、時には立ち止まることも必然なものなのです。ですから決して過激なものではないのです。誰もがコーヒーを飲みながら話せるようなラフな気持ちの中に軸を持つこと。

私にとってはたった一つ。「戦争反対」です。誰もがあたたかな生活を送れる世界へ。これは人間だから考えることができる理想の世界ですが、思考を持った言語を操る人間だからこそ、考えることができるのです。

KEIKO.M